＜コラム＞

エイムズ唯子の「心理学の周辺」

第１２回：「まあ、いいや、でいいのか」の巻

ある日カーラジオを聴いていると、20代とおぼしき女性リスナーからのリクエストメッセージが紹介されていました。いわく「この曲を聴くと元気になるので、ぜひかけてください！」。耳をすませていると、その曲のタイトルは「ま、いいや」。惚れた女に振り回されたあげくに捨てられて、すってんてんのひとりぼっちになってしまった男が、しかし自分は彼女を愛し抜くことができたから「ま、いいや」とひとりつぶやいている、そんな歌詞。しょせん男心はわからないけど、もっとわからないのは、この歌を聴いて元気になるというリスナーさん。ラジオのパーソナリティーいわく、これはフラれても前を向きなおろうとする心境、ポジティブな「ま、いいや」なのである、というのですが…。しかも、このクレイジーケンバンドの歌、なかなか支持されているらしい。

前向きな歌ならほかにいくらでもあるのに、なぜこの歌詞なの？…と「ま、いいや」の癒し効果がどうにも解せない私。わからないのは、この歌が恋の不条理という古今東西の大テーマを扱っているにもかかわらず、ずいぶんとあっさりしていることです。断ち切れない思いといえば、演歌のお家芸。こういうときは、男ならひとり酒場で未練酒をあおり、女なら着てもらえないと知りつつ、涙こらえてセーターを編むんじゃなかったっけ？

そんなことを考えていると、３月18日の朝日新聞に、今の若者を「さとり世代」とよぶ声があるという記事が載りました。クルマやブランドもの、海外旅行にはさほど興味がなく、地元志向で、恋愛には淡白、プロセスより結果重視、豊富な知識はインターネットと読書から得る若者像で、いわゆるゆとり教育を受けた世代とも重なっているとか。「〇〇世代」というくくりでの十把ひとからげの言説には抵抗を感じつつも、この「さとり世代」の特徴は、例の「ま、いいや」に対する私の違和感をそれなりに説明できているよなあ、とつい感心してしまいました。命がけで愛した結果、手ひどくフラれてしまったとしても「ま、いいや」と言える、それは相手を許し、相手を自由にすることであり、ひとつの愛のかたちであり、やさしさなのでしょう。離れていく恋人を未練まるだしで追いかけてストーカーに間違われるくらいなら、全力で踏みとどまる、それはお互いにとって負担の少ない、賢い選択、なのかもしれません。

この話はここで終わるかと思われたのですが、続きがありました。「40代にしておきたい17のこと」（本田健、だいわ文庫）というベストセラー本を本屋で立ち読みしていると「まあ、いいかを追放する」という小見出しにドキッとさせられました。人生も後半に入り、生活がそこそこ安定するのとひきかえに、職場でも家庭でも、まわりに流され、自分のこだわりが薄れがちな40代で、自分にとって本当に大切なものをなくさないためには「まあ、いいか」と思っても「いや、よくない！」とキッパリ宣言することが必要、そんなメッセージでした。あー本田さん、よくぞ言ってくれました！（え？それで本は買ったのか、ですって？もちろんです♪）

「まあ、このくらいが無難かな」で肩まで伸ばしていた髪でしたが、4月4日、　思い切ってショートに。

行きつけの美容院にも「不義理」…Mさんごめんなさい。

（高崎健康福祉大学准教授、フォーラム共同研究者）